特集Ⅰ　「改組２年目の国際学部」

「グローカル・イシュー研究演習Ⅰ・Ⅱ」

田　巻　松　雄

「グローカル・イシュー研究演習Ⅰ・Ⅱ」は、以下の特徴と目的を持つ科目として、今年度開講された。

異分野連携の複数教員と多文化公共圏センターの協働の下、フィールドワーク体験型および学生主体の企画・運営を重視する「アクティブ・ラーニング」科目である。外国人児童生徒教育問題を軸にしてグローバル化する日本の地域の問題に向き合い、課題解決型の事業を企画・運営することを通して、グローバルな実践力を身に付ける。

この授業で使うグローカルという言葉については、基本的に、ローカルな場で生起するグローバルな問題を意味すると押さえておきたい。主に取り上げようと思っていたのは、多文化公共圏センターのHANDS部門が取り組んできた外国人児童生徒教育問題である。

Ⅰ　前期

ある程度の構想は持っていたとはいえ、新規開講科目なので、履修者数と履修希望を確認してから具体的な内容と計画を立てるという想いで初回の教室に入った時に、まず、その人数の多さに驚いた。15人前後かなと思っていたところ、60人前後いる！！　「えっ、これでフィールドワーク等のアクティブ・ラーニングをするのか」と一瞬頭がクラクラしたが、とりあえず顔を出してみた学生もいるだろうし、初回は本科目を開講した背景とHANDSや昨年度３年次生のゼミ生とフィールドワークをした夜間中学校に関するテーマを取り上げることを予定していることを中心に話しをした。

結局、履修者は61名であった。一般論でいえば、61名の履修者はアクティブ・ラーニングの

写真１：栃木市進学ガイダンス
（平成30年10月13日）参加様子

写真２：学生ボランティア真岡市AMAUTA
（平成30年8月）学習支援風景

写真３：学生ボランティア真岡市AMAUTA
（平成30年8月）学習支援記念撮影

科目としては多いだろうが、「来るものは拒まず、去る者は追わず」をモットーとしているし、学生もいろいろな事情で履修を決めたのだろから、相談しながら工夫してやっていこうという気持ちでスタートした。

最初の３週間は、国際学研究科博士後期課程の修了生２名と在学生２名から、かれらの「グローバルな人生」とでもいうべき人生について語ってもらった。修了生の１人である日本人はアメリカでの生活経験が長く、仕事でも世界中を駆け巡ってきた人である。また、フィリピンに対する人道支援にも長く関わってきた。もう一人の修了生は韓国人で、在学生は台湾人とペルー人である。外国ルーツの３人はなぜ日本に来たのかを共通に語るとともにかれらの視点から日本の社会・文化を論じた。

グローバル、ローカル、グローカルなことに対する学生の関心をある程度促したところで、前期の課題をHANDSプロジェクトの活動への参加とした。「子ども国際理解サマースクール」、「アマウタ（AMAUTA）での学習支援」、「多言語による高校進学ガイダンス」の３つであり、少なくとも１回はどれかの活動に参加することを単位認定の条件とした。

「子ども国際理解サマースクール」は、宇都宮市東生涯学習センターの依頼を受けて、小学校の夏季休暇中に毎年実施している市内小学生向けのスクールである。初日（８月８日）は、「世界を知ろう＆世界から学ぼう2018～中国編～」とし、中国について、クイズ、歌、工作体験、お菓子等の観点から中国を学んだ。市内にある中国拳法道場から高龍勝弘さんを講師として招き、カンフー体験も行った。２日目（８月10日）は、「世界を感じよう2018～宇都宮大学外国人学生との交流」として、中国、韓国、ベトナム、香港、ペルーについて学ぶとともに、外国人学生との交流を行った。高龍さんのカンフーコーナーを除くすべてのプログラムを学生が企画・実行した。２日間で約20名の学生が参加した。

「アマウタでの学習支援」は、真岡市国際交流協会が夏季休暇中に行っているペルー人児童生徒への学習支援事業で、主に夏休みの宿題を支援する。７-８月にかけて５回（18時半から20時半ころまで）開催され、延べ約30名の学生が参加した。様々な日本語レベルの子どもたちが集まってくる。自分もたまに支援に参加したが、特に小学生低学年の子は男女ともにホントに可愛く、しかし、勉強を教えるのは簡単ではなかった・・

「多言語による高校進学ガイダンス」は、日本の教育制度や高校受験に関する基本情報を多言語で提供するガイダンスで、今回は、栃木市役所（栃木市と共催）、市内マロニエプラザ（下野新聞社主催の高等学校進学フェアに協力）、本学の３会場で実施した。情報提供というよりは相談になり、２時間近く話し込んだ家族もいた。３日間で約30名が参加した。

Ⅱ　後期

履修者は50名前後と想定して、９月に内容を固めた。直接のきっかけは、９月初旬に開催した第１回外国人児童生徒教育推進協議会である。この協議会は、HANDSが栃木県の外国人児童生徒教育問題を全県的な視点で話し合うために年２回開催しているもので、県教育委員会と９市１町の関係者（教育委員会と小中学校長）が構成メンバーとなっている。１回目の協議会では、各地域から現場報告をしていただいたが、時間の制約ゆえに、十分な情報・意見交換とはならなかった。短い時間ながらも、状況の変化も強く感じ、県内の様々な地域の外国人児童生徒教育問題の現状や課題を広く理解するための資料作りが課題として浮かんだ。そうだ、これを後期のⅡの課題としよう！！

履修者は49名であった。課題は、各地域の外

国人児童生徒をめぐる状況把握を目的にして、９市（那須塩原、大田原、宇都宮、鹿沼、栃木、真岡、小山、佐野、足利）と壬生町の教育委員会で聞き取りを行い、その結果を資料してまとめることである。第１回の協議会終了後に、年内の聞き取り計画について予告しお願いしておいた。学生を10班に分けた。

準備段階として、栃木県国際交流協会事務局長の小林忠教さんに県内の国際化の現状について、お話しいただいた。東京23区と全国政令指定都市を対象にした日本語指導に関する先行調査票を参考にして統一的な調査票（111-112頁参照）を作成し、それに基づき本調査の目的の共有化を何度か図った。先方との聞き取りの日程調整は各班が行った。

第２回目の協議会が2019年１月17日に開催されるので、その時までに資料作成を間に合わせたかった。そのためには、年末までの聞き取りが必須となる。「難しいかもしれない」と思いつつ、学生に「出来るだけ年内に終わらせるように」と訴えた。栃木市班がいち早く聞き取りを実施した（10月22日）。その後、宇都宮、壬生・・と続き、12月27日の大田原市での聞き取りで、９市１町すべての聞き取りが終了した。教育委員会関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

各班の構成メンバーは平均５人である。聞き取りに参加した学生は、先方からの希望もあり、２～３名であった。各班の課題は、聞き取りの準備、実施、調査結果のまとめ、の３つである。その上で、所属する班の調査結果のまとめに関するレポートを全員に課した。このレポートはすでに提出させた。最後の課題として残っているのは、班の他のメンバーが作成したレポートについて感想意見を書くレポートの作成である。自分のレポートと他のメンバーのレポート（同じデータを使用している）との比較を通して学ぶ事は少なくないと思う。

２年次生の約２／３の学生と、前期のサマースクール、アマウタ、ガイダンス、後期の聞きとり（３地域は一緒に行った）を通して、授業時間以外の時間で学生と話をする機会をかなり多く持つことが出来た。最近、記憶力に自信が無くなりつつあるなかで、かなりの人数の２年次生の顔と名前が一致するようになった。これも一つの収穫かな、と思う。

本授業に協力いただいた仲田和正さん（博士課程修了者）、金英花さん（博士課程修了者、多文化公共圏センターコーディネーター）、鄭安君さん（博士課程在籍）、小波津ホセさん（博士課程在籍）に深く感謝申し上げたい。

なお、本授業の時間帯を利用して、２つの講演会を実施した。前期には、橋本義範さん（NPO法人おおさかこども多文化センター事務局長）に「外国につながる子どもの教育支援について－大阪府の特別枠校を例に」の演題で講演頂いた。後期には、李凱莉（Lee Kaili）さん（台湾・財団法人勵馨社会福利事業基金会（The Garden of Hope Foundation、勵馨基金会）研究開発部リサーチスペシャリスト）に「ケア、誰が担うか？台湾における介護および外国人介護労働者の受け入れ政策と実際」の演題で講演いただいた。関西と台湾からのスペシャルゲストのお話からは学生たちは大いなる知的刺激を受けたと思う。橋本さんと李さんにも深く感謝申し上げたい。